道路ユーザーネットワーク広場

NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK

☆三好礼子の☆ ナチュラル・ロード

ボードはオガサカ、ブーツとバインはフラックス。完璧なスノボライダーできあがり♪

三好礼子
エッセイスト・元国際ラリースト
～ http://www.fairytale.jp/ ～

この冬、プロに習ってスノーボードを始めることにしました。松本に引っ越してきた途端に大雪だったので、夫のスノボ熱にはスイッチが入ったものの、私はなかなか入り込めない世界でした。「やってごらん」と言われたのが、崖あり林道の急斜面。ド素人なので「ちゃんとしたスキー場でその道の方に習いたい」という思いで早数年が過ぎました。そしてコロナ禍の今、空いてるスキー場ならばと思い立ち、やっと第一歩を踏み出すことに（地元の医療逼迫警報が解除され、県内観光が推奨されたこともあり）。知人の女性スポーツフォトジャーナリストにオススメの講師を紹介してもらうと、大町の鹿島槍スキー場でスクールもしている白馬出身の相澤盛夫さん（58歳）という超レジェンドでした。20歳にスキーから転向しプロへ。その後デモンストレーターを経て42歳で再びプロとしてコンペの世界へ戻ったという経歴の持ち主です。私のようなヘナチョコ63歳でいいのかしらん。けれど思い返せばなぜかいつも凄い面々にご教授いただいている私。ジョギング、ダイビング、トライアルバイク、トレイルランニング、カヤック、登山、農業。酪農、釣りと、趣味と仕事の境界線がないので、いつも大御所に出会って教えてもらった記憶があります。

まず思い出すのは、かつて報道カメラマンだった横田紀一郎さん（80歳）。アフリカの砂漠で行われるパリダカール・ラリー（前身のオアシスラリー）を直に教えてもらっただけでなく、初めてラリーに出る時に数々のアドバイスを下さいましたが、「砂の下を読まないとゴールには着かない」は一番印象的な言葉でした。夢を達成するには、足の下から。やることをやって真実を知りなさい。様々なメッセージを含んでおり、現場では何度もこの言葉に救われました。

横田さん、1978年にパリダカを日本に紹介し、その2年後に日本人初の参加車となりましたが、車両は二輪駆動車のスターレット（当然砂と格闘し、完走は40年前の1981年）。クラス優勝2回を含み12年間出場した後は、「人と自然と車の共生」に拘り、カヌーと車を合わせた「リバーレイド」を主催し、ハイブリッド車（プリウス）で5大陸10万キロ巡る「エコミッション」、2018年にはサハラ砂漠の第3ルート横断をプラグインハイブリッド車で成功させるなど、エコと共にありました。現在は、毎日連続1万歩を歩いて7年と142日目（2／15）と、幾つになっても挑戦が楽しい横田さんは、素敵すぎるレジェンド。個人的にはナビシートに座らせて頂いたアメリカ横断クラシックカーレースが楽しく覚えています。1924年製のブガッティブレシアは故障してリタイアし、レンタルバイクでゴール まで走ったのですが、レース本番もなんだか楽しくて笑いっぱなし。新聞社のアパルトヘイト特派カメラマンなど、生きるか死ぬかという取材現場をいくつも経験した横田さんだからこその緩急。いつも真剣。でも目一杯楽しむ。コロナが終息したら、人生最後の冒険に出るつもりだそうです。最近はもっぱらウェブの中ですが、会えばきっと「おっ！」というような言葉をたくさん貰える筈です。

若林葉子さんとジムニーで出たモンゴルラリー2010。菅原さんからの助言を毎日いただいた。

車博物館から飛び出したような「グレートアメリカンレース」。横田さんも「楽しかった思い出のレース！」と♪

同じくパリダカと言えば、の菅原義正さん（5月に80歳）も長いおつきあい。何十年間、車やバイク競技に関わる女性を（たまたま）何人もサポートしてきた方ですが、パリダカギネス記録を持ち、日野レンジャーを幾度も表彰台にあげた実力者の言葉は、やはり凄いものでした。性差をあげたくはないのですが、たぶん女性でないとあそこまでの言葉は戴けないかもしれません。

（同志でライバルという状況もあり、当時はみな同性に対しては厳しく、テクニックは盗めという時代）。バイク畑の私が四輪で参戦する時に頂いた言葉で役に立ったのは、砂丘越えの時のイメージでした。「車の後ろから押してやるような感じでアクセルを踏むといいよ」。バイクは手足の微細な操作で埋まらないように速度を落としすぎないように越えるのですが、車はいい意味で少しラフなので、車重や車幅などの大きさをイメージして操る。「所詮、こんな大きなものを自分の力では動かせないからね」と。越えるイメージをその度に思い出し、助けられました。そんな秘密のキーワードをいっぱいもらってゴールした時の喜びといったら、もう。人生は出会い。キーマンに教えてもらったことは、他のどの分野や時代でも（このコロナ禍でも）役に立ち、色褪せません。さあて、相澤師匠はどんな言葉で私を新しい世界に連れていってくれるのでしょうか。期待爆発♪

日本人で初めてダカールに着いた1981年は、時間外完走。笑顔がでるビバークでのコーヒータイム。左上が横田さん。

2WDだと更に悲惨な砂丘ラッシュ。ここは2時間かけて抜け出したという。

九州の散歩道

韓国・済州島発祥の「九州オルレ」

フリージャーナリスト　湯浅玲子

韓国の人々は登山やハイキングがとても好きです。ある韓国の都市で、見晴らしがいいと聞いて訪れた場所はかなりの急勾配。私は登るのに息も絶え絶えでしたが、韓国人の家族連れがたくさんいて、おしゃれな若いカップルも楽しそうにハイキングデートをしてるのに驚きました。そんな韓国発祥のトレッキングコースが「九州オルレ」です。

「オルレ」とは、もともと韓国・済州島の方言で「通りから家に通じる狭い路地」を意味する言葉。「韓国のハワイ」とも呼ばれる済州島では、豊かな自然の中でトレッキングする人が増えて、いつしか「オルレ」はトレッキングコースの総称として使われるようになりました。「九州オルレ」は人気を集めていた「済州島オルレ」をお手本に誕生したのです。

現在、九州各地に本格的なものから気軽なものまで21のコースがあります。済州島同様、四季折々の美しい自然があり、海も山もある九州ではバラエティ豊かなトレッキングが楽しめます。また歴史的な由来があるコースも多く、古代からの歴史がある九州ならではと言えるでしょう。例えば宮崎の小丸川コースは、約1300年前に朝鮮半島からたどり着いた百済王族にちなんだコースとなっています。

オルレは海や山などを五感で感じ、自分のペースでゆったり歩けるのが魅力。コースとして認定されるには、いくつかの要件を満たさなければいけません。できるだけ山、森、里などの古い舗装されていない道を使うこと。コース内の要所には「カンセ」と呼ばれる標識を設置すること。地域の文化や人々とふれあえる要素を取り入れ、コースの維持は地域住民で行うことなどです。

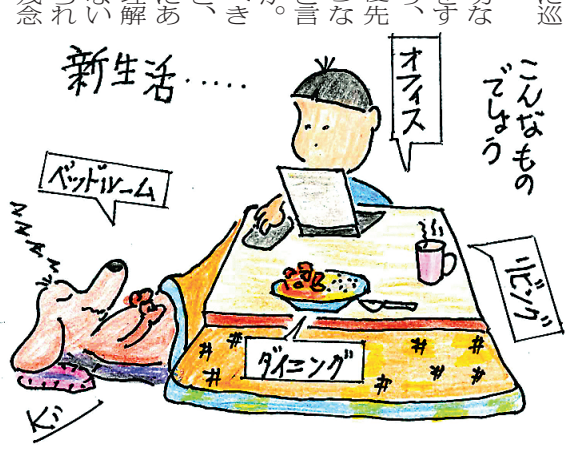
コースの目印となる「カンセ」は、済州島の馬をモチーフにしたオブジェや、青と赤のリボンを木などに結びつけたもの、石にペイントされたものなど、さまざまなタイプがあります。これに沿って歩けばコースを外れることがありません。コースの中でユニークなカンセを見つけるのも楽しみのひとつです。

また、オルレには守るべきマナーもあります。他人の庭にみだりに入らない、ゴミは必ず持ち帰る、道端の草花や木を採らない、途中で出会う旅行者や地元住民の人とは笑顔であいさつを交わすなどです。安全性を守るため、未舗装の道は決まった経路を通る、コースから外れた傾斜地には立ち入らないといったことも大切です。マナーを守って、九州の豊かな自然を楽しみたいと思います。

（写真提供：九州旅ネット）

コースの目印となるさまざまな「カンセ」

ハッと思いました



コロナ禍の一年が過ぎました。改めて町を見渡すと、色とりどりのマスクで顔が覆われて、何だか異世界に来てしまったようです。

一年も続くと、色々と思うところがあります。「喉元過ぎれば熱さを忘れる」、「覆水盆に返らず」、「人の振り見て我が振り直せ」、「安物買いの銭失い」、「お願いばかり・おんぶにだっこ」、「GOTO差別」、「間尺に合わない」みたいなフレーズが頭に巡ります。

しかし、大切なのは、「今何をすべきか」であり、それは、「優先順位を見誤らない事」であると言いたいのですが。

「今何をするべきでないのか」と、それも事細かにあげなければ、理解と判断が出来ないお方が多数おられるようです。残念！

そう言えば昨今、突如として表に出てきた感のするのがSDGs。2015年の国連サミット（加盟国193ヶ国）で提唱された、2016年から2030年で、持続可能（？）な世界の実現に向けて達成すべき17の目標と言うことですが、かつて「カーボンオフセット」と称して環境ビジネスで騒いでいたような気がしますが、薄っぺらい、上っ面だけの免罪符としての「お題目」だとしたら、日蓮上人に申し訳ないですが、会えばきっと「おっ！」というような言葉をたくさん貰える筈です。

同じくパリダカと言えば、の菅原義正さん（5月に80歳）も長いおつきあい。何十年間、車やバイク競技に関わる女性を（たまたま）何人もサポートしてきた方ですが、パリダカギネス記録を持ち、日野レンジャーを幾度も表彰台にあげた実力者の言葉は、やはり凄いものでした。性差をあげたくはないのですが、たぶん女性でないとあそこまでの言葉は戴けないかもしれません。

（同志でライバルという状況もあり、当時はみな同性に対しては厳しく、テクニックは盗めという時代）。バイク畑の私が四輪で参戦する時に頂いた言葉で役に立ったのは、砂丘越えの時のイメージでした。「車の後ろから押してやるような感じでアクセルを踏むといいよ」。バイクは手足の微細な操作で埋まらないように速度を落としすぎないように越えるのですが、車はいい意味で少しラフなので、車重や車幅などの大きさをイメージして操る。「所詮、こんな大きなものを自分の力では動かせないからね」と。越えるイメージをその度に思い出し、助けられました。そんな秘密のキーワードをいっぱいもらってゴールした時の喜びといったら、もう。人生は出会い。キーマンに教えてもらったことは、他のどの分野や時代でも（このコロナ禍でも）役に立ち、色褪せません。さあて、相澤師匠はどんな言葉で私を新しい世界に連れていってくれるのでしょうか。期待爆発♪

車博物館から飛び出したような「グレートアメリカンレース」。横田さんも「楽しかった思い出のレース！」と♪

若林葉子さんとジムニーで出たモンゴルラリー2010。菅原さんからの助言を毎日いただいた。

日本人で初めてダカールに着いた1981年は、時間外完走。笑顔がでるビバークでのコーヒータイム。左上が横田さん。

2WDだと更に悲惨な砂丘ラッシュ。ここは2時間かけて抜け出したという。